
I B -インフィニット・バカトリオ- [無限の3バカ烈伝]

暮灘雪夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IB インフィニット・バカトリオー 「無限の3バカ烈伝」

【Nコード】

N1514Y

【作者名】

暮灘雪夜

【あらすじ】

今日も激しい女尊男卑が吹き荒れるIS世界…

しかし、そんな風潮どこ吹く風と、お気楽に過ごす者達がいたっ！！

人はその者達を【バカ】と呼んだっ！！

この物語は…

バカ故に世間の風潮を良しとせず…

バカ故に世界に風穴を開けた者達の…

血と汗と涙と戦いの記録であるっ！！

お約束ですが、嘘です（――）

えゝ、実はこのシリーズ、暮灘が現在休載中（泣）の【バカと努力っ娘と四角形】という作品を現役で書いてる頃から大変お世話になってる、【なろう】バカテス二次創作の大御所の御一人、ヒョウガ先生との連動企画だったりします（；＾―＾A

いやゝ、ヒョウガ先生が「ISでコラボ書く」と言いなはるんで、暮灘も便乗させてもらおうたんですわ♪

中身はタイトル通り、【IS】と【バカとテストと召喚獣】のコラボ・ギャグとなつとります☆

あつ、そういえば…

【バカテス・キャラ】

←

【IS世界】

という構造なので、基本的にISの二次創作でバカテスキャラは少数登場（予定）ですよ。

こんな話ですが、どうかよろしくお願いしますm（ m

第1話 “バカがロケットでやってくる!?” (前書き)

皆様、初めまして〔

ようこそ【IS×バカテス】という変則しすぎて寧ろ気持ちよくな
っちゃったカオティックな世界へ♪

変則と変態を書くのが大好きな暮灘ですm〔m

さてさて、早速記念すべき第1話の内容は…

さっそく、メイン・ヒロイン(!?)の登場です☆

いや、この表現が正しいのかかなり謎ですが(笑)

そして、”彼女(?)”の回想から語られる悲しい過去とは…?

様々な伏線と重要情報を無理矢理押し込み、いよいよ第1話スター
トです♪

第1話 “バカがロケットでやってくる!” “

それは春…

全ての始まりの時期…

美しい桜が街を彩り、全てが輝いて見える季節…

そして、そんな穏やかな陽光が降り注ぐ空を切り裂くように飛んでくるのは…

くるのは…

【巨大ニンジン】 つ!?

” ひゅるるるゝゝゝ…

ちゅどおおおーっん!!”

ニンジン(?)は、弾道飛行を描きながら、人気のない…とは言えない公園に”着弾”した…

そして…

” ばがんっ!”

どうやら、全金属製のニンジン：呼称は”メタル・ニンジン”にしよう。

何やら、ニンジンを題材にした童謡のMetal Versionっぽいが、細かい事は気にしてはいけない。

とにかく、中から蹴り飛ばされるような勢いでメタル・ニンジンの一部が開いた。

どうやらハッチになっていたそこから現れたのは：

「イテテ：【お姉ちゃん】も【束ちゃん】も酷いや。まさか大洋間弾道飛行で日本に戻ってくるとは思わなかったよ…」

クリクリとどこか小動物を思わせる大きなハーベスト・ブラウンの瞳：

チェリー・ピンクの唇：

真っ白なりボンを不思議の国のアリスっぽく結び目が上に来るように巻かれた、サラサラのハニー・ブロンドのロングヘアー：

メタル・ニンジンから現れたのは：
スコテイツシュ・キルト・チェック柄のミニスカートとエンブレム入りのブレザーがよく似合う、

【問答無用の美少女!!】

だった♪

ただし、生物学的な区分は、

” 謎（笑） ”

であつたが：

明久 side—

皆様、はじめまして♪

ボク、” 吉井明久” よしい・あきひさ って言います☆

あれ？

なんかアチコチで誰かがズッコケた気が：

あつ、いきなりアメリカからロケット・ニンジンで弾道飛行で飛んできて、防空迎撃網を交い潜りながら密入国（？）するなんて、非常識な上に派手な登場してすみません（汗）

それに国防軍並びに戦略自衛隊の皆さん、面子潰してごめんなさい
〔

で、でもスクランブルで飛んできたF-22CJを4機瞬殺したのは、ボクの意味じゃなくて、ロケット・ニンジンの自動迎撃システムだからね？

だからって200発以上ミサイル飛ばしてくるのは、やり過ぎかなあゝつとはやり過ぎだと思うけど…

（だから、ボクもつい本気で迎撃しちゃった訳で）

でも、本当に納税者の皆さんは今頃泣いてるんじゃないかな？
ミサイルも戦闘機も高いのに…

（でも、驚いたなあゝ）

見かけはかなりアレだけど、このロケット・ニンジンって大気圏内でアニメ”マクロス・プラス”に出てくる【ゴーストX-9】みたいな性能があるとは思わなかったよ。

（さすが、束ちゃんが『自信作だぴょん♪』って言ってただけの事はあるよおゝ）

でもさでもさ、お姉ちゃんも束ちゃんも…

『アキちゃん。最近は航空運賃も燃料サーチャージ料もバカにできません』

『アキちゃんは、私とあーちゃんの可愛い可愛いモルモット（実験動物）、とういかハムスター（愛玩動物）なんだから大人しく乗ってくれないと駄目だぴょん♪』

ってロケット・ニンジンに押し込んで、リニア・カタパルトから射出するんだもん！
酷いや！

えっ？

状況は分かったから経緯を話せ？

うーん…

どっから話そうか？

取り敢えず、ボクがアメリカにいた理由から話そうかな？

そう、あれは小学校を卒業したばかりの頃だから、もう3年前になるかな…

かいそうっ！

3年前：

”The Day of Destiny (D－Day：運命の日)”

ボクはアメリカで研究職に就いてる筈の姉さんから送られて来た”手紙(?)”に固まっていた：

正確には、A4サイズの国際郵便封筒に入っていたのは：

【来なさい】

と大きく書かれた一枚の写真だった。

固まる理由は、シンプルな文面じゃなくてむしろ写真：

【裸白衣で寝転んで、脚の間を人差し指と中指を”くぱあ”と広げるカメラ目線の姉さん】

だった。

当然のように、無修正だ…

勿論、ボクは何度も目をこすって確認し直したけど、現実は何も変わらなくて…

他にも情報がないかって写真を裏返してみると…

ありました（汗）

アキくんへ

アキくん、お元気ですか？

姉さんも写真で見分かれるとおり肌の色艶も良く、とても元気にしています。

（姉さん、多分頭の中は元気じゃないと思うんだ…）

実は今、姉さんは親友のウサギさんと共同研究をしています。

アキくんは確かゲームが好きで、得意でしたよね？

今、姉さんとウサギさんが開発してるのも、ウサギさんに言わせれば、

『ゲームをリアルにダウンロードしたみたいな、究極の体感ゲームみたいなもんだぴょん♪』

という事なので、是非ともアキくんにもテスト・プレイヤーとして参加して欲しいのです。

（ウサギが開発したゲームって一体…？）

もし、来てくれないのなら…

姉さんは寂しくて悲しくて、思わず手が滑って送って写真の画像データのアキくんの関係先全てに、【弟に調教され性的な奴隷になった哀れな姉、吉井怜です】というタイトルを付けて携帯と言わずパソコンと言わず無差別送信してしまいそうです。

「姉さん、すぐに行くからねっ!! (泣)」

再起動を果たしたボクは気がつくともう叫んでいた!

「で、でも姉さんって今どこにいるんだろ…?」

一昨年くらいまではマサチューセッツにいたはずだけど、そこから先は聞いて無かったし…

というか、この封筒って差出人も書いて無ければ、切手さえ貼ってないんだけど…?

(どうやって届いたんだろ?)

僕がアタフタしてると、何故か玄関先で僕が手紙を読むのを待っていてくれた親切な郵便屋さんが、何か兎型の手の平サイズの機械を出してポチッとな?

『やつほ〜♪ アキちゃん元気かなあ? この束さんの美声を聞いているって事は元気だね? そうに決まった♪』

聞き覚えのない声が機械から流れてくる。

「えっと…ICレコーダー？」

コクリと頷く大柄な郵便屋さん。

『唐突だけど、このメッセージを聞いた後、目の前のポストマンが正体見せるからそれに乗っておいで♪ あっ、それとこのレコーダーは情報漏洩防止の為にメッセージ再生終了後に自動的に消去されるから☆ 半径5mは跡形も無く吹き飛ぶよぉー！ じゃあ、爆発10秒前♪』

「うわぁーっ！？ 早くそれを捨てて！！」

すると郵便屋さんはオーバースローでぎゅーん！って投げた。

スッゴくいい肩してるなぁー。

なんか遠くで『おしおきだべー！』的なドクロ型のキノコ雲が上がってる気がするけど…

（気にしたら負けだね？ きっと…）

それよりも、

「君が変形するって、どゆこと？」

ボクがそう言うなり、

”バリバリッ！”

って郵便屋さんの衣装が裂けて、中から出てきたのは…

「へっ？ ロボット…？ 君、ロボットだったの？」

コクンと再び頷く郵便屋さん。

道理で身長が3mくらいあって、手とか顔とかメカニックでメタリックだと思ったよ♪

”がこおん”

すると、そのロボットさんの内部が開いて一部が変形。
ちょうどボクがスッポリ入れるぐらいのスペースができた。

いや、乗り込むというより、

（むしろ、装着するって感じかな？）

ボクは姉さんが法律的にギリギリアウトっぽい画像をばら蒔くのを
阻止すべく、考える前に飛び乗った！

考える前にまず動け！

ねだるな勝ち取れ！

の精神だよ。

ボクが乗り込んだ途端にかかるフワリとした浮遊感…

あつ、なんか気持ちいいかも…

だから、ボクは叫ぶ！

「あい・きやん・ふらぁーい！！」

この日、ボクは生まれて始めて音速を突破した…

途中、何処からか

『ハアハア…可愛い男の娘…ハアハア…可愛い男の娘を抱っこ…私、絶対にI Sの中で勝ち組ですう〜♪』

って声が聞こえた気がしたけど…

空耳だよね？

以上、回想終了♪

多分、アメリカへ着いたボクは姉さんと、信じられないことにあの姉さんが親友と言い切ったメタル・ウサミミのお姉さんと知り合った。

『私の事は束ちゃんでもいいよ♪』

『では、私の事は”お姉ちゃん（永遠の17歳）”で』

『なんで姉さんまで呼び方変えなきゃいけないのっ!?!?』

『呼んでくれないなら、あの写真を…』

『OK。束ちゃんにお姉ちゃんだね?』

フッ…

弟なんて無力なもんさ…

まあ、そんなこんなでボクと東ちゃんとお姉ちゃんの共同生活は始まったんだ。

まあ、他にも色々あったけど…

ボクの髪が長い理由って…

『アキくん、髪を勝手に切ったらお小遣い減額です。髪のお手入れを欠かしても減額です』

ボクが女の子の服を着てる理由も…

『アキちゃんは、荷物とか持ってきてないよね♪ 大丈夫☆ 東さんにドゥンと任せなさい!!』

任せたら、女の子の服しか無かった(泣)

しかも、回りに洋服屋とか無かったし…

ま、まあ、他にも色々話したい事はあるけど、今は急いでるからっ
!!

えっ？

何処に行くのかって？

” 藍越学園 ” って高校の入試だよ？

それじゃあ、行ってきまあゝす♪

この時のボクは、まだ知らなかったんだ。

ボクにあんな出会いと運命が待ってたなんて…

第1話 "; バカがロケットでやってくる!?!"; (後書き)

皆様、ご愛読ありがとうございますm (m

この物語は、あくまでギャグです♪

そして、連動企画&コラボという…カオスなストーリーになっております(^^;;

いや、正直に言えばバカテス・キャラを描くのが久しぶり過ぎて、あの世界の雰囲気を手くだせたか、あるいはISの世界観と上手くミックスできたか激しく不安ですが、もし読んでくださった皆様が面白いと思って頂けるなら、不定期&短期連載になりますが、描いていこうかなあ〜と思ってます(o^ー´) b☆

それでは、また次回があることを願いつつ (

第2話 "天を舞うのはゲッターなれど、バカは懐かしきバカと再会

皆様、本日二度目のこんばんわー☆

深夜アップになりましたが、めげてはいない暮灘です（^^；

なんと、第1話をアップしてから書き始め、完成してしまった第2話です（o^ー^）b☆

不定期更新とは、早まる場合もあるって事で…ってこのネタ、前にもやりましたっけ？（^^；

いつまでも、あると思うなネタと勢い！

というのが身に染みて暮灘だけに、執筆を優先してしまいました。

感想を書いて頂いた皆様、暮灘の他の作品をお待ちの皆様、エゴ丸出しなのはわかっていますがご容赦を（――）

さて、今回のエピソードは…

バカテスから美少女キャラ（？）っぽいのが二人出演します。

一人は変化球で、もう一人は…ボーク？（^^；

ともかくにも、またまた伏線とネタを満載した…というよりサブ
タイからしてネタな第2話、お楽しみいただければ幸いです（o^
ー´）b☆

第2話 “天を舞うのはゲッターなれど、バカは懐かしきバカと再会

アキちゃん
明久 side—

って絶対に（ ）の中の注釈は要らないよねっ!?

いや、それはともかく…

ボクが離れた途端、メタル・ニンジンは変形を始めて…

『『ゲッオー・ブレイク!!』』

そして三分割しながら飛んで空中で合体すると、

『チェーンジ・ドラオン! スイッチ・オン!!』

全長50m位のトマホーク投げたり額からビームを撃ちそうなか”になってました（汗）

（束ちゃん、スパロボとか好きだもんなあ…）

毎度の事だけど…

（エネルギー保存の法則とか質量保存の法則や慣性の法則とかって、どうなってるんだろ…？）

いや、そういうのを無視するのが、束ちゃんやお姉ちゃんだって分かってはいるけどさ…

ボクがそんな事を考えてると、え〜と…

【三位一体の合体ロボ的な何か】

は、追いかけてきた【何処かで見覚えのある真っ赤な丸模様】を描いた戦闘機とか戦闘ヘリ相手に無双してたりして…

（ボク、知らない！）

取り敢えずこれ以上関わったらいけない気がしたボクは…

『チェンジ・ライオン！ スイッチ・オン！！』

そのまま後退りして逃走しました（汗）

『音速を超える戦いを魅せてあげましょう…マッハ・スペシャル！』

超音速で戦車隊を蹴散らす音を、背中に聞きながら…

「ね、ねえ、”ミズキ”」

ボクが呼び掛けると、

『はい♪ アキちゃん、なんででしょう？』

と、首に巻いたチョーカー（首輪）、正確にはそこに下がってる”ド派手なデザインのクロス”から返事が帰ってきた。

えーと、正式には【量子演算式光バイオニューロチップ型能動的制御多目的汎用サポート疑似人格システム】だったっけ？

束ちゃん曰く

「ガンダム00のハロ、FSSのファティマ、ナイ○ライダーのナイト2000みたいなものよ♪」

って言ってたけど…

（例えの年代がバラバラだね？）

束ちゃんって本当は何歳なんだろう？

（ま、まあどうでもいいかっ！ うん！）

なんか背中に氷柱を入れられたような寒気を感じたボクは、慌てて思考を切り替えた。

「あのままにして…だ、大丈夫かな？」

明日には日本って国が歴史用語になってたりしないよね？（汗）

『大丈夫ですよ〜♪ シャロンさんは優しい人ですから☆ 不思議と死人は出ない筈ですよ？ 多分ですけど』

「今、”不思議&筈&多分”って言ったよねっ！？ それ、スツゴい不確定要素なんだけどっ！？」

シャロンって言うのは、正式には”シャロン・アップルトン・システム”って言って、今大暴れしてる【ゲッター・ニンジン】に搭載されてる某マジと同じ三位一体の疑似人格型制御コンピュータらしいんだ。

元々は束ちゃんとお姉ちゃんが、某ヴォーカロイドのプログラムを色々いじって機能拡張してるうちに出来上がったプログラムらしいんだけど…

ミズキの説明によれば…

ドラゴンとしての自分…

ライガーとしての自分…

ポセイドンとしての自分…

で構成されてる…ってえっ！？

「色々駄目じゃん！！ それって陸海空で闘争本能剥き出しの殺る気満々ってことだよねっ！？」

『心配無用です♪ あれにはゲ○ター線とか危ない物は使ってませんから☆ ただちょこっと熱核反応炉とかを3基積んで直列に繋いだりしてますから、下手に破壊されると少おっし地形は変わっちゃうかもしれませんけどおっ♪』

それ違う意味で…というかストレートな意味で危ないって！！

「ぼ、ボクってそんなのに乗っけられて打ち出されたの！？」

『心配ご無用ですよっ♪ 燃料漏れとかありませんでしたし』

あつたら今頃ボクはこうして歩いてないと思うけどなあ…

『シャロンさんはあれでアキちゃんの密入国をサポートしてくれてるんですから、気にしたら駄目です♪』

いや、密入国になっちゃったのは、束ちゃんとお姉ちゃんの送り出し方が問題であって…

いや、それは言ってもしょうがない。

それより、

「潜入を破壊工作じゃなくて破壊活動でうやむやにするってやり方は、実際どうなんだろう…？」

束ちゃん、お姉ちゃん…

破壊工作と破壊活動は別物だからね？

『それよりもアキちゃん、そろそろ急がないと【藍越学園】の入試に遅刻してしまいますよ？』

「そうだったあーっ！！」

ボクとミズキは、慌てて走りだした。

後ろからさっきから連続した爆発音とか聞こえてるけど、男は後ろを振り向かないものだよね？　ね？

さてさて、やってきた試験会場だけど。

ボクは外まではミズキの道案内と、内部の係員の人の案内で会場へ来たんだけど…

「えっ？　なんだって”IS”があんなところにあるんのさっ!？」

あの人型のロボットっぽいのって”IS”だよね？

『さあ？　それは私にも…』

”IS”：正式には【インターナショナル・ストライカー】。

束ちゃんやお姉ちゃんが開発してて、ボクがこの3年間テスト・プレイを繰り返した最新鋭超体感ゲーム機だ。

例えば…【戦場の絆】ってゲーム知ってる？

あれはモビルスーツってロボットのコックピットを模したゲーム筐台に乗り込んで戦う戦術シミュレーションだけど、ISはその進化版みたいな物で、

『マルチフォーム・パワードスーツを来て、世界を舞台に戦うんだ
ぴょん♪』

って束ちゃんは言ってたっけ…

詳しくは知らないけど、束ちゃんのお姉ちゃん以外のもう一人の親
友の”ちーちゃん”って人がその名人で、【モンド・グロッソ】
って世界大会で優勝してるんだってさ♪

（ボクもいつか出場したいなあ〜）

意外と得意なんだよ？

「でも、造りは新しそうだけど、ちょっとデザインは古い…かな？」

ラスボス機の白騎士に、ザコの打鉄のイカツさを合わせたようなデ
ザインだけ…

ボクがISに触れようとした瞬間！

「明久？ 明久なのかっ!？」

声に振り返ったボクの視線の先にいたのは、下着…

じゃなくて、肌着っぽいスポーツウェアを着た濃いココア色の短い
髪と、エメラルド色の瞳を持つ”美少女”…

でもボクにはわかる。

この少女は、男でも女の子でもない、”第3の性”だって…

だって…

「もしかして、” 秀ちゃん” …？」

「やっぱり明久なのじゃなっ！！」

3年振りに再会した幼馴染みは、ボクに駆け寄ってきて…

「会いたかったぞっ！！」

” どすんっ！”

ボクにタツクルするとそのまま押し倒して、そのままマウント・ポジションから…

「3年間も連絡を寄越さず…心配させよってからに…！！」

” Chu! ☆”

強引に唇を重ねた…

『男の娘同士のキス！ 男の娘同士のマウスtoマウス！！ 嗚呼、カミサマ…ここは天国ですかあゝゝゝっ！！！？』

…ミズキ、うるさい。

久しぶりに再会したボクと幼馴染みの木下秀吉：

あれ？

でも、秀ちゃんがどうしてここに？

秀ちゃんも、【藍越学園】を受験するのかな？

だったら嬉しいなあ♪

第2話 “天を舞うのはゲッターなれど、バカは懐かしきバカと再会

皆様、ご愛読ありがとうございましたm〔m

IB：インフィニット・バカトリオ（無限の三バカ）の二人目は、
なんと秀吉でしたあゝ♪

まあ、三人目は本来の…ですが（笑）

どうやら、この異色コラボも興味を持って下さる読者様もけっこう
いらっしゃるようで、作者としては嬉しい限りですm〔m

今は取り敢えず、ネタと勢いがある間は書きためるという方向です
が、それが尽きても需要があるならレギュラー連載とかも考えて行
きたいと思っています。

そんなこんなで次のアップは早くて明日ですが、皆様のお許しがあ
るなら取り敢えず集中連載を試みようかと思っています。

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ〔

第3話 “基本的にIBではアキちゃんは受けで、秀ちゃんは攻めで

皆様、こんにちわ☆

何とか今日も生きてる暮灘です（^^；

他の暮灘現役連載作品をご愛読の皆様、一時的にですが、少しの間この”IB”の短期集中連載に傾注させていただきます（――）

詳しくは活動報告に描きますが、急速に脳内画像が活性化してまして、勢いとネタがあるうちにある程度の形を作らないと、消えて二度と書けなくなりそうなので（^^；

さて、今回の見所は：

秀ちゃんが肉食系小悪魔（！？）です。

アキちゃんの可愛さが書いてて変なテンションになるぐらい異常です。（”バカテスト”を参考にしたからか？）

ミズキは（主に自分に）素直なデバイスです。

アキちゃん&秀ちゃんのIB作中の強さレベルが、ちょっぴり分か

ります。

そして、ラストにバカトリオの最後の一人が：

こんなエピソードですが、楽しんでいただき感想なんかをいただけ
た日には、作者大喜びです（o^ー'）b☆

第3話 “基本的にIBではアキちゃんは受けで、秀ちゃんは攻めで

吉井明久と木下秀吉は、小学校時代を共に過ごした親友同士である…

3年振りに再会する二人の幼馴染み（ツイン男の娘）…

押し倒される明久に、唇を重ねる秀吉…

いや、だから同性の親友だってばさ（汗）

” ぴちゃ…くちゃ…”

淫らな水音が場に流れ、絡められる舌は上手く甘く…

明久は、ただされるがままに秀吉に口内を蹂躪されていた…

そこに抵抗の意思は最早無く、明久はその甘美な感覚に身を任せて…

（明久…）

（秀ちゃん…）

『Yes! Yes! ヘブンズ・ゲートはすぐそこですわ☆』

このまま年齢制限に引っ掛かりそうなシーンが続くと思いきや…

”ちゅぱっ…つう…”

二人唾液が混じりあった混合液が糸を引いた…

「久しぶりの明久の唇、実に美味だったぞい♪」

「もう…秀ちゃん、相変わらず強引だね？」

秀吉は立ち上がり、

「ヌシもこういうシチュエーションの方が好ましいじゃろ？ なんせ、昔は自分からはキス一つできぬ奥手じゃったからの」

意味ありげに笑った。

押し倒された姿のまま明久は、顔を真っ赤にしてソッポを向き、

「…ばか」

と、小さく呟いた。

「それにしても、そそる姿じゃのう」

と、妙に色気のある舐めるような視線を注ぐ秀吉。

「スカートがはだけて細い脚に、女物の可愛いデザインの小さな下着が丸見えだぞい☆」

「やんっ！」

慌てて起き上がってスカートを押さえる明久。

「秀ちゃんのバカーっ！！」

「クッククック…3年という歳月は、こうまで人を変える物かのう？
明久が女物の下着を履きこなすようになるとは…これは愉快じゃ♪」

「うっ…」

明久はペタンと座りこんだ姿勢で、涙目+上目使いというある意味最強コンボで、

「だって束ちゃんもお姉ちゃんも、こういう下着しか用意してくれないし…」

秀吉は、クスツとアルカイツク・スマイルを浮かべ、うんざり跪くように明久の耳元に唇を寄せると…

「今のお主は本物の少女のようじゃ…明久、お主は愛らしく可憐じゃ♪ 実にワシ好みじゃぞ？」

明久はただでさえ赤かった顔を更に紅らめ、

「も、元から可愛い秀ちゃんに、い、言われても…」

だが、明久にこれ以上反論させる気はないのか秀吉は、

”ペロッ”

「ひゃん!？」

突然、耳の穴を舐められて、その擦くすくすったさに確かに秀吉の言うように少女のような小さい悲鳴を上げる明久だった。

「秀ちゃんのばか…きらい…」

床に”のの字”を書いて拗ねる明久に、秀吉は苦笑しながら、

「すまんすまん。つい悪ふざけが過ぎたわ。じゃが、それも明久の愛らしさ故…許せ」

「あううう…っ…」

ワタワタする明久を満喫したのか秀吉は、ふと真顔になり、

「ところで明久よ、いくつか質問があるのじゃが…良いか？」

「う、うん…」

「先ずは一つ。ワシが明久だと一目でわかった理由なんじゃが…も
しかしてお主、この三年間、身長が伸びてないのではないのか？
骨格も殆ど変わってない…寧ろ、か細くなった気がするのう…」

「うぐう…」

「それに明久よ…お主、そこまで声が高かったかのう？ その、何
というか…」

秀吉は言葉を選ぶようにして、

「こういう表現は適切かどうか分からぬが…お主の声、某錬金術師
アニメに出演していた時の”釘宮理恵”の声にそっくりなのじゃが
…」

「うみゅっ!？」

そうなのだ…

今までの明久は、全て世に言う”くぎみー声（笑）”しゃべってい
たのだっ!!

さあ、今までの明久の台詞を全てくぎみーボイスで脳内再生してみ
よう…

…
…

…
…
…
…
萌えない？

「多分、それは束ちゃんやお姉ちゃんの実験のせいじゃないかなって…」

「？　　どういう意味じゃ？」

そして明久は、大雑把にはあるがこの三年の出来事を秀吉に話すのだった。

「なるほどのう…投薬実験や食事の調整か。最近のゲーム開発は随分と過激なのじゃな？」

「うん。束ちゃんに言わせるとね…」

『アキちゃん、この”IS”をただのゲームと思ったらいけないぴ

よ〜ん♪ この束さんが全知全能の一部を傾けて作ったマシンだも
ん☆ 戦闘のリアルさは、リアルって言葉の常識を覆すレベルかも
よ〜ん♪』

「実際、スッゴいリアルでさあ♪ ” I S ” で全てのステージをク
リアする為には、軍隊でエースくらい軽くなれる技量と判断力がい
るって束ちゃん言ってたっけ…」

「それはまた過酷じゃの〜。んっ？ その言い方じゃとお主はクリ
アしたのか？」

「したよ〜☆ 各勢力のエース騎はそんなに強くないけど、隠しキ
ャラで” 真・ラスボス ” の【白騎士】っていう機体がメチャクチャ
強くてさ。ビームを斬り払うとか” 悪質なチート技（笑） ” 使っ
てるし…1機でゲーム・バランス壊しまくってるって感じかな？」

すると秀吉は演技ではなく素で驚いた顔で、

「それは凄いのじゃ！ ワシも実はさっき” 代表戦モード ” とやら
でプレイしてな。ブリテンのエースには何とか勝てたが、チャイナ
の【見えない砲撃】に苦戦してのう…引き分けに持ち込むのが清々
じゃったわ」

うんうんと腕を組んで頷く秀吉。

明久は合点がいったという顔でポンと手を打ち、

「あっ！ それで秀ちゃん、そんなスポーツ・ウェアのインナーみ
たいな格好してたんだ？」

「うむ。なんでも全身で操作するゲームらしいので動きやすい服装が奨励されるてようだな」

「そっかあ。確かにそうかもね？ ん、でも始めてのプレイでそこまで行ったのって、むしろ凄いと思うよ♪」

すると秀吉は苦笑しながら、

「そうでもないぞい。あのブリテン騎はビット：いや”BT”だったかのう？ とにかく遠隔操作砲台を出す時に止まる妙なクセがあるじゃろ？ そこを突いて接近戦に持ち込み仕留めただけじゃ」

「えっ！？ よくそのクセをファースト・バトルで見抜いたねっ！？」

秀吉はフフンと少し自慢気に、

「明久、忘れたのか？ ワシはこう見えても役者の卵じゃ。人を観察してクセを見抜くのは、お手のものじゃ♪ じゃなければ、即興で真似て演じるなど出来はせぬ」

今度は明久が関心したように、

「ほえ：秀ちゃん、やっぱりスゴいや！ でも、近接の間合いに入る前にミサイルとか撃って来なかった？」

すると秀吉は苦笑いで、

「あの程度のヒョロヒョロ弾に当たってやるほど、お人好しではあらぬわ。しかも弾幕ならともかく、数はたった二発じゃろ？ 一呼

吸で五発飛んでくる姉上の【閻魔五段突き】に比べれば、どうい
うことはない」

明久は、文武に秀でた秀吉の双子の姉を思い出しながら、

「ゆーちゃんも相変わらず？」

秀吉は大きく頷き、

「うむ。相変わらず修行三昧じゃ。姉上の武の志は高いからのう…
何しろ、目指す先は【何人たりとも只の一撃で葬れる拳】…真の”
必殺拳”じゃからな」

それを習得して木下優子は何をしようというのだろうか？（汗）

「明久、もし良ければお主のプレイを見せてはくれぬか？ なに、
わりと血沸き肉踊るゲームだったのだな。少し上級者のプレイを盗
みたいのじゃ♪」

秀吉の急な頼みに明久は困ったように…

「それはいいけど…でも、【藍越学園】の受験が…」

すると秀吉、「おや？」という顔で、

「お主も藍越を受験するつもりだったのか？ なら、ますます問題

ないぞい☆」

「なんで？」

不思議そうな明久に、

「ワシも藍越を受験しようここに来たのじゃがな。真っ先に言われたのが、着替えてそれをテスト・プレイすることだったのぢゃ♪」

「へえ〜。受験にゲーム使うなんて、随分ユニークなんだね？ 反射能力とか空間認識能力とかを測定したいのかな？」

「さてのう…ん？」

秀吉は、微かに聞こえた足音に振り返り、

「おお、”一夏”戻ったのか？」

視線の先にいた学生服姿の長身少年に微笑んだ。

「ああ。ただいま、秀吉」

一夏は秀吉に親しげに微笑み返した後、明久を柔らかい視線で見つ

「俺も出来れば君のプレイ、見てみたいんだけど…いいかな？」

今、ここに”三人のバカ”が集結を果たした：

”運命のバカ達”を：！！！

歴史は、世界は彼らに何をさせようというのかっ！！？

第3話 “基本的にIBではアキちゃんは受けで、秀ちゃんは攻めで

皆様、ご愛読ありがとうございましたm〔m

昔からお世話になってる皆様からのご感想も嬉しかったし、同じくらしい新しい読者様からの感想も嬉しいものです♪

いや、というかISとバカテスのマッチングが上手くいってるのかイマイチ自信が（^^；

今回は、秀ちゃんが実は強キャラであることが判明…
って、シミュレーションとはいえ、せつしー倒して鈴と引き分けるやんっ!？

明久は…汝、問うなかれ（^―^；）

ラストにいっくんがちよっぴり顔を出しましたが、次回は本格的コンタクトの予定です（o^ー’）b☆

それでは、また次回お会いできる事を祈りつつ〔

第4話 “アキちゃんのキーワードは美少女、秀ちゃんは小悪魔。ド

皆様、おはようございますm（　　）m

変な時間に失礼します。

色々あってまたまた眠れなかった暮灘です（^^；

どうせ眠れないのなら、開き直って1本書いてしまえ♪

と、書いてたら本当にIB第4話が出来上がってしまいました（
　　^；）

さて、今回のエピソードは…

の前に注意点。

現在と同じ路線の

【心優しくて鈍感で清く正しい一夏】

をご希望の読者様は、お戻りなされた方がいいです。

何故かというと、”IB”の一夏は、

【大の”女尊男卑”嫌い】

で、強者と言いながら、いざというとき弱者のフリをしたり、実態のない強さをひけらかし威張りちらすタイプが、憎悪するほど嫌いです。

だから：

ぶっちゃけ、女の子にも容赦無いです（えっ？）

『女が強いってんなら、手加減は要らないよな？』

って本当に手加減しないタイプです（^| ^;）

ある意味、真っ直ぐな少年が歪んだ価値観のせいで”真っ直ぐ歪んでしまった”というか…（; ^| ^ A

そんな一夏で構わないという方のみお読みください m（ m

内容は、前回第3話の一夏視点と、一夏の中学時代とかが語られますよ（o ^ _ ^） b ☆

第4話 “アキちゃんのキーワードは美少女、秀ちゃんは小悪魔。”

さて、少し時間を巻き戻そう。

ついでに視点も変えてしまえ。

そうすれば、また別の何かも見えてくるだろうから。

世界は常に多角構造で、人の主観で全てを把握できる物ではない。

何故なら、人は自らの立ち位置で見える物しか主観として認識できないのだから：

と、真面目に語った所でIBにシリアスを求めるなど、砂漠で水を求めるが如しなのだが（笑）

??
side—

（ど、どうしよう…）

【試験会場】テスト・スペースに戻ってきたら、同じ中学から一緒にテスト受けに来

たダチが、見ず知らずの女の子押し倒してました…

（しかし、女の子が女の子襲ってるようにしか見えん…さすがは秀吉！）

「秀吉…恐ろしい（男の）娘」

いや、感心するところじゃないだろおーっ！？
しゃんとしろ、”俺”！

えゝ…

取り敢えず、状況を整理しようぜ？

なんか、何故か試験会場に置いてあった”IS”…【インフィニット・ストラトス】を俺が触ったらいきなり起動した。

そうしたら、係員だか研究員だかがワラワラ出てきて、”俺”は連行されましたさ。

（よし、ここまではOKだ）

えっ？

詐欺じゃないんだから俺俺言っていないで、そろそろ名乗れって？

あっ、そうだったな。

コホン：

我が名は”織斑一夏”おりむらいちか！！

一片の曇りなく鍛え磨かれし、一振りの真鋼まがねの刃なりっ！！

どう？ 決まった？

えっ？

『何その中二病的な名乗りは？』だって？

酷えなあゝ。

いや、師匠に名乗りは正々堂々とやれって言われてるもんでね。

んじゃあ、普通に：

俺は”織斑一夏”。

俺がホンのガキの頃：

まだ、”IS”なんて妖しげなモンが出てくる前の時代：【男女平等】って時代を知ってる身としちゃあ、【女尊男卑】なんて思想が気色悪くてしょうがない男だ。

そんな理由で、古式の実戦剣術とかその辺なんぞを少々かじってる。

武の世界はいいぜえ！

男も女もなく、ただ強いか弱いかな…それだけしか基準がないっての

がシンプルでいい。

まあ、そんな生き方してりや当然、『ISは女しか云々』と、妙な言い掛かりを付けてくる奴は事欠かないが、その時は、

『んで、お前の身内にIS乗りはいるのか？』

と先ずは聞く。

口先三寸の嘘をつく女は多いが：99%以上はいないわな。

（そりゃそうだ。全世界に束さんがばら蒔いたコアの数は、精々400ちょい…）

生産されてるISの数は、実際にはもっと少ない。

身内にIS乗りがいる確率なんて、ぶっちゃけ宝くじに当たる確率より低い。

そこで大人しく引き下がりがいいが、大抵は引き下がらない。

だから”軽く”実力行使。

首根っこを鷲掴みして吊り上げる。

所謂、ネックハンキング・ツリー（首吊りの木）ってプロレス技さ。

『俺の握力は200kgを軽く超える』

うそびよん。

その7割位が精々だ。

『賭けようじゃないか？ 俺がお前の首をヘシ折るのが早いか、お前が女の力と主張するISが駆けつけてくれるのが早いか？なんてのはどうだ？』

そして、更に心を粉碎する為にこう続けるのさ。

『時間が足りねえってんだったら：俺は別にお前を犯しながら鉄拳叩きこんで、くたばるまでって条件でもいいんだぜ？』

まあ、ここまでやると恐怖と絞まってるので、大半は失禁する。

だから、言ってるんだよ。

『テメエの物でもねえ力をひけらかすからこういう目にあう。所詮お前は純粋な力の前じゃあ、小便垂れ流す程度の抵抗しかできない、薄汚いクソ袋に過ぎんのさ』

ISってのは、殆どが国家管理だ。
個人所有してる、あるいは自分の意思で勝手に持ち出せる人間は殆どいない。

たかが一人の民間人の為に出てくるなんざ、まず有り得…滅多にない。

そして、地べたに落とされ、不様に這いつくばりゲホゲホ咳き込んでる顔面に…

『呪うなら自分の力のなさを呪え。恨むなら、自分の手の平にない力を威を誇った己の愚かさを恨め…お前は【無力】だ』

靴底でヤクザキック気味に”そげぶっ!”して、はい終了♪

ああ、これでも気を使ってるんだぜ?

死なないor気絶しないように、だがしっかり痛み感じるように鼻骨や前歯をへし折るのは、これで結構力加減が難しい。

それに俺は、そのまま放置して帰っちゃまうからな。

鼻骨や前歯がグチャッと潰れて血塗れ顔面の女なんて、普通は犯そうとは思わないだろ?

むしろそういう方が萌えるって変態に運悪くエンカウントしてブチこまれようが、お持ち帰りされようが知ったこっちゃない。

あん?

お前はやらないのかだって?

俺は、【女尊男卑】なんて薄気味悪い”宗教”に感染した”狂信病”なんかに突っ込みたくはないからな。

思想的疫病に体液感染するなんざ、御免被るよ。

（そういや、中1の頃に俺の行動に文句つけてきた【主義者】の女教師をフルボッコにしたっけか：）

ああ、”主義者”ってのは自分を性革命運動の闘士を気取ってる【好戦的性差別主義者】の事だ。

ISが出てきてから、自分達の社会的価値が上がってと勘違いした無能な俗物一派ってどこか？

なんの事はない。

ちよいと趣向を凝らして罫を張り、頭から少々熱湯ぶっかけて、追い討ちに唐辛子汁（キムチ鍋のもとだったっけ？）をぶっかけ、痛みで転げ回ってるところを蹴り続けただけだ。

なんか途中で命乞いしてたみたいだけど、俺は構わず蹴り続けた。

聞く必要ないだろ？

殺すような蹴り方してないんだから。

ただ痛みで気絶できねーように蹴ってただけだ。

んで、その誰にケンカ売ったかも理解してないマヌケ教師の神経だ

か思考だかが擦り切れた頃に駆け付けた教師達：

俺は足元の”残骸”の頭を踏みつけながら、特に同類の”主義者”教師に中指1本をおっ立て、『かもーん』と指をクイクイ動かしながら、

『んで、次は誰がこうなりたい？』

と、俺の上履きの下で壊れたデータディスクみたいに「ごめんなさいごめんなさい」と繰り返す汚物を中指から切り替えて立てた親指で指した。

結局、その事件はうやむやにされた。

俺は別にカンカン（少年鑑別所）送りになっても構わなかったんだけど、【千冬姉】ともめたくない”上の方”が揉み消したらしい。

ああ、言っとくけど女教師だったスクラップ、怪我自体は大したことないぜ？

まあ、あの様子じゃ【鉄格子のはまった病室】からは、しばらく出れそうもないけどね。

それにしても…

（千冬姉の主義者嫌いは有名だからな…）

我が姉ながら、主義者どもが千冬姉を賛美する集会に乗り込んで、

『私をキサマらのくだらん思想の広告塔にでもしてみろ…その首全てを跳ね飛ばし、醜い顔をお台場で晒し首にしてくれる』

って言い切った時は、実に痛快だった！！

（というか、あの目はマヂだったな…）

きつと千冬姉には、俺よりデカイキ○タマが付いてるに違いない。

いや、面と向かってそんな事を言った日には、”お台場の晒し首”になるのはきつと俺だけどね（汗）

ま、その事件が現実にあったって証拠は、俺に付けられたアダ名…

【狂犬】

しか残ってないけどな。

簡単に言えば、俺は：

『力を誇示していいのは同じく力でねじ伏せられる覚悟のある者だけ』

って当たり前の理屈を理解しないまんま、テメエが手にした力でもないのに威張り腐った奴が、男女以前に嫌いって事だな。

だから、ISがどうこうってのを笠に着て女性優越論を語る奴は、同質の”力”で【説教（そげぶっ！）】して、その【思い上がり（げんそう）】を砕く事にしてる。

格好いい呼び方するなら、さしずめ【高慢殺し（プライド・ブレイカー）】ってところかな？

そりゃそんな生き方をしてりゃ、どっかの古典小説じゃないが、【俺は友達が少ない】になっちまうと思うが、どういう訳か要注意危険人物の筈なのに、どういう訳か俺には友達が少なくは無かった。

確かに俺の悪名を利用しようとして接触してきた奴もいたし、実際に利用した愚か者もいたが、そういうのは問答無用で”そげぶっ！”だ。

まあ、それはさておき中でも特に仲が良かったのは、【五反田弾】
って気のいい茶髪ロン毛と…

（今押し倒されたままの女の子を、妙に色っぽい目線で視姦（笑）してる）

【木下秀吉】だ。

気が付くと、秀吉は不意に真面目な顔になり、女の子と話し出した。
どうも様子を察するに、あの女の子は秀吉の昔馴染みらしい。

（女の子に興味しめさないから、容姿込みでてっきりアツチ系かと

思ってたけど…)

なるほど…

ああいう感じの娘がタイプだったか…

(確かにうちの中学には、ああいう”真性お嬢様系”はいないしな…)

あるいは…

(実はあの娘が想い人で、だから他の娘に興味を示さなかったとか、か?)

秀吉の会おう前の過去に興味を持った俺は、少し聞き耳を立てる事にした。

「なるほどのう…投薬実験や食事の調整か。最近のゲーム開発は随分と過激なのじゃな？」

ちょっと待て！

今、あの女の子はゲームって言わなかったか…？

「実際、スッゴいリアルでさあ♪”IS”で全てのステージをクリアする為には、軍隊でエースくらい軽くなれる技量と判断力がい

るって束ちゃん言ってたっけ…」

（束さん…アンタ、あの娘に会っていたのか？）

いや、問題はそこじゃない…

（その娘に何を教え、何をやらせてたんだ…？）

会話から推測すると、ISをゲームか何かと思い込まされていた…？

（バカなっ！？ …いや、でも有り得るか？）

普通の人間の目の前にISを持って来たって、それがISだとは思わないかもしれない…

（俺だって、”あの時”にISを装着してた千冬姉を見なければ、あれが本物のISだって気付かなかったかもな…）

ISはその希少性から、一般人が生で見る機会は殆ど無い。

その先入観から、目の前にISを置かれても普通ならISを模したシミュレータ、ゲームと言われたらゲームと信じるかもしれない…

「それはまた過酷じゃのゝ。んっ？ その言い方じゃとお主はクリアしたのか？」

「したよ☆ 各勢力のエース騎はそんなに強くないけど、隠しキ

ヤラで”真・ラスボス”の【白騎士】っていう機体がめちゃくちゃ強くてさ。ビームを斬り払うとか”悪質なチート技（笑）”使ってくるし…1機でゲーム・バランス壊しまくってるって感じかな？」

（ちよっ！？　　まてっ！！）

いくらシミュレータだからって、あの女の子は、【あの”白騎士”】を倒したってのかよっ！？

「明久、もし良ければお主のプレイを見せてはくれぬか？　なに、わりと血沸き肉踊るゲームだったのでな。少し上級者のプレイを盗みたいのじゃ♪」

「それはいいけど…でも、【藍越学園】の受験が…」

（ヤバイ…）

俺もあの娘のプレイを見たくなってきた…！！

「お主も藍越を受験するつもりだったのか？　なら、ますます問題ないぞい☆」

「なんで？」

「ワシも藍越を受験しようここに来たのじゃがな。真っ先に言われたのが、着替えてそれをテスト・プレイすることだったのぢゃ♪」

「へえ〜。受験にゲーム使うなんて、随分ユニークなんだね？ 反射能力とか空間認識能力とかを測定したいのかな？」

気が付いたら、俺は二人に向かい歩きだしていた。

「さてのう…ん？」

俺の気配か足音に気付いたのか、秀吉は振り返り、

「おお、”一夏”戻ったのか？」

第4話 “アキちゃんのキーワードは美少女、秀ちゃんは小悪魔。ド

皆様、ご愛読ありがとうございましたm〔m

実はタグの【残酷な描写】云々というのは、この一夏の過去の為につけたような物です（^^；

作者的には、本当は【人間として妥協できないぐらい真っ直ぐ過ぎて、歪んだ世界からは歪んで見える一夏】は大好きなんです、皆様の目にはどのように映ったでしょうか？（^^；

何というか：書いてる作者さんが言うのもなんですが、上条さんの言おうか、悪条さんの（笑）と言おうか（^| ^；）

今はただ、IBの一夏が読者様に嫌われない事を祈るのみッス

次回はいよいよ明久のIS操縦技術が明らかに？

それでは、また次回があることを祈りつつ〔

追伸

一夏は何人かのISヒロインのフラグが消滅するのと引き換えに、
既にこの時点で某バカテス・ヒロインに初期フラグが立ってたりし
て…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1514y/>

I B -インフィニット・バカトリオ- [無限の3バカ烈伝]

2011年11月4日07時11分発行